



報道関係各位

NHK international, inc.
一般財団法人 NHK インターナショナル

文化庁海外メディア芸術祭等参加事業「Lucca Comics and Games 2014」 企画展「〈日常〉を少しだけズラす—*Riflessi di realtà*—」開催のご案内

文化庁が主催、一般財団法人 NHK インターナショナルが企画・運営する「海外メディア芸術祭等参加事業」は、メディアアート、映像、ウェブ、ゲーム、アニメーション、マンガ作品等の優れたメディア芸術作品を紹介するため、海外のフェスティバルや施設において、文化庁メディア芸術祭の受賞作品を中心に展示・上映・プレゼンテーション等を実施しています。

このたび、イタリア・ルッカ市で開催されるフェスティバル「Lucca Comics and Games (ルッカ・コミックス・アンド・ゲームズ) 2014」に参加し、10月18日(土)から11月2日(日)まで企画展「〈日常〉を少しだけズラす—*Riflessi di realtà*—」を開催します。

本展では、昨年度[第17回]文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞の荒木飛呂彦氏『ジョジョリオン—ジョジョの奇妙な冒険 Part8—』の直筆マンガ原稿39点を含む展示のほか、3組のアーティストによる映像作品を出展し、大衆文化から現代美術、商業作品からインディペンデント作品に広がる日本のメディア芸術の諸相を紹介します。

文化庁海外メディア芸術祭等参加事業 「Lucca Comics and Games 2014」 企画展 「〈日常〉を少しだけズラす—*Riflessi di realtà*—」

会期:2014年10月18日(土)~11月2日(日) 9:00~19:00

会場:パラッツォ・ドゥカーレ(Palazzo Ducale - Piazza Napoleone, 1, Lucca, Italy)

※ 「Lucca Comics and Games 2014」のフェスティバル会期10/30~11/2のみ開館時間を延長

入場料:無料

*フェスティバルへの入場にはフェスティバルパスが必要です。本企画展の入場にパスは必要ありません。

<http://jmaf-promote.jp/global/>

主催:文化庁

共催:Lucca Comics and Games

企画ディレクター:伊藤 遊(京都精華大学国際マンガ研究センター研究員)

事業アドバイザー:吉岡 洋(京都大学大学院文学研究科教授/美学・芸術学)

毛利 嘉孝(東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科准教授/社会学)

企画/運営:一般財団法人NHKインターナショナル

本件に関する問い合わせ先

文化庁海外メディア芸術祭等参加事業事務局(一般財団法人NHKインターナショナル内)

担当:湧井(わくい)・長谷川(はせがわ)

E-mail: jmaf-info@nhkint.or.jp TEL: 03-6415-8500 FAX: 03-3770-1829



文化庁海外メディア芸術祭等参加事業 企画展

「〈日常〉を少しだけズラす—*Riflessi di realtà*—」

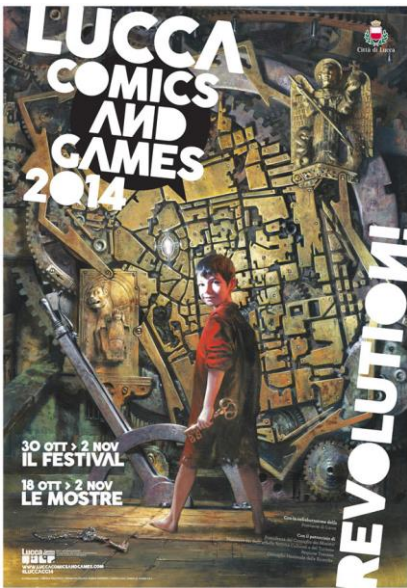
会期：2014年10月18日(土)～11月2日(日) 9:00～19:00

会場：パッツォ・ドゥカーレ(Palazzo Ducale - Piazza Napoleone, 1, Lucca, Italy)

「Lucca Comics and Games(ルッカ・コミックス・アンド・ゲームズ)」は、1966年よりイタリア・ピサ近郊の城壁都市ルッカで開催されているヨーロッパ最古の歴史あるコミックフェスティバルです。

文化庁メディア芸術祭では、昨年に引き続き、「Lucca Comics and Games*」に参加し、今年度は、コミックスセクションのメイン展示会場にて、京都精華大学国際マンガ研究センター研究員の伊藤遊氏をディレクターとし、4組のアーティストによる企画展「〈日常〉を少しだけズラす」を開催します。

本展では、[第17回]文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞を受賞した、荒木飛呂彦氏による『ジョジョリオン』の貴重な資料を展示するほか、アニメーションや映像作品といったメディア芸術の広範な表現を一堂に展示します。〈日常〉に浸透する日本におけるマンガの受容環境に着目した本展では、大衆文化と現代美術を接続する今日的な創造力と、私たちの〈日常〉に批評的な視点を与える作品を紹介します。



Lucca Comics and Games 2014 フェスティバルポスター



Lucca Comics and Games 2013 展示風景

*Lucca Comics and Games

「Lucca Comics and Games」には、現在、コミックス、ジュニア、ミュージック、ゲーム、ジャパンパレス、ムービーの6つのセクションが設けられ、市内各所の特設展示会場には15,000ものブースが並びます。会期中には、展覧会やマンガ、ゲーム、キャラクターグッズなどの販売、体験型の新商品展示や作家との交流会など様々なイベントが開催されます。

文化庁メディア芸術祭は、2013年より「Lucca Comics and Games」に参加しています。昨年は『シーマン～禁断のペット～』で第3回文化庁メディア芸術祭デジタルアート(インタラクティブ)部門優秀賞を受賞したゲームデザイナーの斎藤由多加氏を派遣し、コンシューマーゲームからスマートフォン向けゲームまでのゲーム制作のノウハウについて講演を行いました。



展示テーマとプランについて

企画ディレクター：伊藤 遊(京都精華大学国際マンガ研究センター)

日本において、マンガやアニメーションは、一般的には、芸術というよりもエンターテインメント性を帯びた商品とみなされています。しかも、それらは、ごはんを食べたり、お風呂に入ったりと同じような〈日常〉の行為の中で消費されているものです。実際、日本では、マンガ本がレストランに置いてあることは普通ですし、お風呂やトイレに入りながら読まれるということもしばしばあります。

一方、特に 2000 年代以降の日本において、現代美術の世界では、〈日常〉というものが、多くの作家たちのテーマになってきました。彼ら／彼女らは、日常品にちょっとだけ手を加えるなどした作品で、私たちの〈日常〉を少しだけズラして眺めるための批評的な視点を与え続けています。つまり、現代は、マンガやアニメーションといった娯楽と、アートの世界が、〈日常〉というキーワードにおいて接近している時代と言えます。

もっとも、「メディア芸術」という概念が提出されることの意義は、それらを並列しただけでなく、昨今の現代美術が持っている〈日常を少しだけズラす〉という視点を、当の〈日常〉の中で行う可能性も示唆しているからです。

本展の目的のひとつは、単なる娯楽商品だと思われるマンガやアニメーション、ゲームといったポピュラーカルチャーを、〈日常〉を少しだけズラしてみるための批評ツールになり得ると認識していただくことです。そして、そうしたツールが、美術館や難しい哲学書の中ではなく、私たちの〈日常〉の中にあふれているということを知ってもらえたらと思っています。

ここでは、私たちに「〈日常〉を少しだけズラす」という視点を与えてくれる刺激的なマンガ作品および映像、アニメーション作品 —荒木飛呂彦『ジョジョリオン』、湯浅政明『四畳半神話大系』、久野遥子『Airy Me』、SHINCHIKA『JSCO』/『H2Orzx』/『山のみち』— を紹介することで、そのことを考えてみたいと思います。

伊藤 遊 / ITO Yu

京都精華大学国際マンガ研究センター 研究員

1974 年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。専門はマンガ研究・民俗学。マンガ研究のテーマは「マンガとミュージアム」、民俗学のテーマは「路上観察学」の元祖「考現学(こうげんがく)」の方法論研究。現在は、京都精華大学国際マンガ研究センター研究員として、京都国際マンガミュージアムなどで数多くのマンガ展の制作に関わる。共著に『マンガミュージアムへ行こう』(岩波書店、2014 年)、『妖怪画の系譜』(河出書房新社、2009 年)など。担当したマンガ展に「赤塚不二夫マンガ大学展」(2011 年)、「土田世紀全原画展」(2014 年)など。



出展作品

■荒木 飛呂彦『ジョジョリオン —ジョジョの奇妙な冒険 Part8—』

[2011～/マンガ/第17回マンガ部門大賞]

本展では、荒木比呂彦氏による『ジョジョリオン』の特別展示を実施します。直筆マンガ原稿 39 点、カラー複製原稿 21 点の計 60 点の資料を展示するほか、荒木氏の制作風景をおさめた映像資料、本展ために描かれたオリジナルイラストを展示します。

作品解説

M県S市杜王町。震災で隆起してできた土地である通称「壁の目」で、一人の青年が発見された。記憶を失っていた彼は「東方定助」と名づけられ、さまざまな手がかりを元に自らの素性を探る。東方家の秘密と思惑、杜王町で起きた過去の事件、定助の素性をたどる重要な手がかりとなる「吉良吉影」なる人物……さまざまな謎に定助は巻き込まれる。緻密なストーリー構成、超能力を目に見える形で表現することでマンガ表現に革命をもたらした概念“スタンド”によるバトルに加え、サスペンスにも更なる磨きをかけ、多くの読者を惹きつけた。連載28年目を迎えた「ジョジョの奇妙な冒険」シリーズの第8部。

荒木 飛呂彦/ARAKI Hirohiko

1960年、宮城県生まれ。1980年、「週刊少年ジャンプ」(集英社)第20回手塚賞に『武装ポーカー』で準入選、同誌に同作品でデビュー。87年から続く『ジョジョの奇妙な冒険』は絶大な支持を獲得。2012年に開催された原画展は2会場通算、13万人を動員。イタリアでも原画展が開かれるなど、海外での評価も高い。



(上)『ジョジョリオン—ジョジョの奇妙な冒険 Part8—』第4巻表紙より

(下)『ウルトラジャンプ』2011年6月号

©LUCKY LAND COMMUNICATIONS/SHUEISHA

■湯浅 政明『四畳半神話大系』

[2010/テレビアニメーション/第14回アニメーション部門大賞]

作品解説

「薔薇色のキャンパスライフ」を夢見る誇り高き大学3回生の「私」だが、悪友・小津や謎の自由人・樋口師匠に振り回され、孤高の乙女・明石さんとはなかなかお近づきになれない。あの時、別の道を選んでいれば……? 湯浅政明監督の驚異の映像マジック、上田誠の構成・脚本、話題のクリエイター布陣で送る、不可思議世界を巡る不毛と愚行の青春奇譚。

湯浅 政明/YUASA Masaaki

1965年、福岡県生まれ。アニメーション監督、脚本家、デザイナー、アニメーター。監督作『マインド・ゲーム』は毎日映画コンクール大藤賞、文化庁メディア芸術祭アニメーション部門大賞、モンリオール・ファンタジア国際映画祭で4つの賞を総なめにした。『四畳半神話大系』は、テレビ作品初の文化庁メディア芸術祭アニメーション部門大賞を受賞した。



『四畳半神話大系』 ©四畳半主義者の会



- SHINCHIKA 『JSCO』 [2008/映像作品]
『H2OrzX』 [2009/映像作品]
『山のみち』 [2009/映像作品]



『JSCO』 ©2007 SHINCHIKA All Rights Reserved.

SHINCHIKA は、記憶や個人的な物語、都市のイメージの断片を、インターネットを利用して編集することにより、映像、作詞、作曲、立体インスタレーションなど幅広い表現を手がけるアーティストユニットです。本展に出展する映像作品には、現代日本の社会や文化に浸透しているアニメーションやゲーム、おもちゃ等のモチーフが登場し、そこに潜在する個人の記憶が描かれています。そこにあるのは、マンガやアニメやゲームといった「ポピュラーカルチャー」と呼ばれるものが、特殊な知識を持った集団によって楽しられている「サブカルチャー」ではなく、(日常)に溶け込んだ現代日本のリアルな状況とも言えます。また、彼らの作品からは、映像表現や音楽までの多種多様な表現を自在に操り、ひとつの作品へと組み込む独自の表現力を見ることができます。

SHINCHIKA(シンチカ)

勝村富貴/久門剛史/藤木倫史郎/藤野洋右/吉川辰平

KATSUMURA Toki/HISAKADO Tsuyoshi/FUJIKI Rinshiro/FUJINO Yosuke/YOSHIKAWA Shimpei

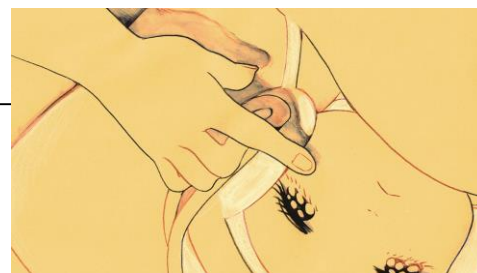
硬派な浪速の男たちが集う伝説の名画座。大阪新世界にある新世界国際地下劇場からのインスピレーションを受け、2002年に結成された娯楽ユニット。80'sの記憶や都市や個人的な物語の中からイメージの断片を繋ぎ合わせ編集する事。有機的なものと無機的なものの中からSHINCHIKA 的バランスと共に新たな感覚を生み出す事。そのイメージの引用と作用(異化効果)を通し、フィクショナルな物語の中にSHINCHIKA 個人の同時代的な物語が展開する。京都、東京、大阪を中心に活動中。

■久野 遥子『Airy Me』

[2013/短編アニメーション/第17回アニメーション部門新人賞]

作品解説

謎の生体実験が行われる病棟で日々看護婦から投薬を受ける被験者。ある時、看護婦が被験者のスイッチを押すと、キメラ(複数の動物のハイブリッドからなる怪物)へと変貌を遂げてしまう……。人にあらざる姿になろうとも人間の欲求を持ち続けた時、果たしてどんな光景が生まれるのか。そしてそれは看護婦と被験者の関係にどんな変化をもたらすのか——。アーティスト・Cuushe の同名曲から得たインスピレーションをもとに、2年近い歳月をかけて描かれた3,000画からなる手描きアニメーション作品。病棟内の時が止まったような風景と対照的な、揺れ続けるカメラワークや柔らかな色彩によって、独自の物語世界を描いている。



『Airy Me』 ©2013 Kuno Yoko All Rights Reserved.

久野 遥子 / KUNO Yoko

1990年生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業後、現在会社員。在学中は少女や動物、ヤンキーをテーマにしたイラストレーション、立体物、アニメーションなどいまいちグラフィック感のないものを中心に制作。



関連上映

■文化庁メディア芸術祭 受賞作品等上映

日時:10月31日(金) 16:30~

11月1日(土) 20:30~

会場:Cinema Centrale (Via di Poggio Seconda, 36, 55100 Lucca, Italy)

フェスティバル会期中、文化庁メディア芸術祭の受賞作品等を紹介する映像プログラムを上映します。文化庁メディア芸術祭上映プログラム「JAPAN POP ENERGY」と「Portrait of Japanese Animation—日本の映像描写」の2つのプログラムを上映します。

「Portrait of Japanese Animation—日本の映像描写」

日本人作家によって創造された映像作品には丁寧な手仕事で完成させた繊細さや目に見えない空気感をもとらえる、日本人ならではのこだわりを感じることができます。映像プログラム「Portrait of Japanese Animation」に収録された9作品では日本の映像表現として独特の世界観をみることができます。

日本人初のアカデミー賞受賞監督となった、加藤久仁生監督の『つみきのいえ』では、繊細かつ郷愁的な絵世界で表現された大切な「想い」が観る人の心に届きます。『ISSEY MIYAKE A-POC INSIDE』では、白い点(ドット)の動きが私たちの記憶を引き出し、ムーンウォークとなって歩き出します。技術にとられない緻密な作業の積み重ねから生み出された作品は鑑賞者一人一人の五感に響くことでしょう。



『つみきのいえ』加藤 久仁生 ©ROBOT

■上映作品

『rain town』石田 祐康

(2011/短編アニメーション/第15回アニメーション部門新人賞)

『まつすぐな道でさみしい』岡本 将徳

(2013/短編アニメーション/第16回アニメーション部門審査委員会推薦作品)

『記憶全景』横田 将士

(2009/映像作品/第12回アート部門審査委員会推薦作品)

『森の木琴』原野 守弘 / 西田 淳 / 菱川 勢一 / 松尾 謙二郎 / 津田 三朗 / 大磯 俊文

(2012/映像作品/第15回エンターテインメント部門審査委員会推薦作品)

『1347smiles』新井 風愉

(2014/映像作品/第17回エンターテインメント部門審査委員会推薦作品)

『ab_rah』吉野 耕平(networks)

(2011/映像作品/第14回エンターテインメント部門審査委員会推薦作品)

『ISSEY MIYAKE A-POC INSIDE.』佐藤 雅彦+ユーフラテス

(2008/映像作品/第11回アート部門優秀賞)

『写真館』なかむら たかし

(2014/短編アニメーション/第17回アニメーション部門審査委員会推薦作品)

『つみきのいえ』加藤 久仁生

(2008/短編アニメーション/第12回アニメーション部門大賞)



「JAPAN POP ENERGY」

文化庁メディア芸術祭の歴代受賞作品の中から、現代日本のポップカルチャーが感じられる作品群を集めてお送りします。東京・新宿の街自体を舞台にした田中秀幸監督のミュージックビデオ「べろべろ」、植草航、石田祐康ら若手監督たちの日本アニメのスタイルを巧みに用いた作品など、一見 POP に見える表現の裏に込められた作り手たちの大胆な自己主張を感じていただきたいと思います。

プログラム監修：岡本 美津子(東京藝術大学大学院映像研究科長・教授)



『フミコの告白』石田 祐康 ©石田 祐康



『ウサビッチ』© Viacom International Inc.

■上映作品

- 『フミコの告白』石田 祐康
(2011/短編アニメーション/第14回アニメーション部門優秀賞)
- 『やさしいマーチ』植草 航
(2012/短編アニメーション/第15回アニメーション部門新人賞)
- 『永野 亮「はじめよう」』新井 風愉
(2013/ミュージックビデオ/第16回エンターテインメント部門新人賞)
- 『Hietsuki Bushi』Omodaka
(2012/映像作品/第15回エンターテインメント部門新人賞)
- 『KiyaKiya』近藤 聡乃
(2013/短編アニメーション/第16回アニメーション部門審査委員会推薦作品)
- 『'Ho-Ho' This message is boiling hot』岡本 将徳
(2010/オタワ国際アニメーション映画祭2010/ミュージックビデオ部門ファイナリスト)
- 『Airy Me』久野 遥子
(2013/短編アニメーション/第17回アニメーション部門新人賞)
- 『ONE AND THREE FOUR』平岡 政展
(2014/短編アニメーション/第17回アニメーション部門審査委員会推薦作品)
- 『新しい生物』ユーフラテス
(2013/映像作品/第16回エンターテインメント部門審査委員会推薦作品)
- 『ウサビッチ』
(2007/短編アニメーション/第10回アニメーション部門審査委員会推薦作品)
- 『ハイスイノナサ「地下鉄の動態」』大西 景太
(2013/ミュージックビデオ/第16回エンターテインメント部門新人賞)
- 『就活狂想曲』吉田 まほ
(2013/短編アニメーション/第16回アニメーション部門審査委員会推薦作品)
- 『べろべろ』田中 秀幸
(2012/映像作品/第15回エンターテインメント部門優秀賞)
- 『夜ごはんの時刻』村本 咲
(2014/短編アニメーション/第17回アニメーション部門審査委員会推薦作品)



参考

文化庁メディア芸術祭について

文化庁メディア芸術祭はアート、エンターテインメント、アニメーション、マンガの4部門において優れた作品を顕彰するとともに、受賞作品の鑑賞機会を提供するメディア芸術の総合フェスティバルです。平成9年度(1997年)の開催以来、高い芸術性と創造性をもつ優れたメディア芸術作品を顕彰し、受賞作品の展示・上映や、シンポジウム等の関連イベントを実施する受賞作品展を開催しています。本年度[第18回]は、国内は応募数過去最多の2,035作品、世界71の国と地域から1,818作品、合計3,853作品の応募があり、文化庁メディア芸術祭は国際的なフェスティバルへと成長を続けています。また、文化庁では、メディア芸術の創造とその発展を図ることを目的に、文化庁メディア芸術祭の受賞作品を国内外で広く紹介する多彩な事業を実施しています。海外・国内展開や創作活動支援等の関連事業を通じ、次代を見据えたフェスティバルを目指しています。

■文化庁海外メディア芸術祭等参加事業

本事業は、世界各地のメディア芸術関連施設やフェスティバル等にて文化庁メディア芸術祭の受賞作品を中心に上映・展示・講演を行う文化庁メディア芸術祭の関連事業です。



平成25年度[第17回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展



海外メディア芸術祭等参加事業(FILE2014)展示風景

平成26年度[第18回]文化庁メディア芸術祭

作品募集 2014年7月7日(月)～9月2日(火)
受賞発表 2014年11月下旬
受賞作品展 2015年2月4日(水)～2月15日(日) ※2/10(火)休館
会場:国立新美術館(東京・六本木)他
ウェブサイト <http://j-mediaarts.jp>
Facebook <http://www.facebook.com/JapanMediaArtsFestival>
Twitter @JMediaArtsFes

